

聖書:ルカの福音書18章28~34節

説教:神の国のためにす

はじめに

今日のところに入る前に27節までのあらすじを簡単に振り返ります。

あるとき一人の指導者がイエスのところにやって来て「何をしたら永遠のいのちを受け継ぐことができるか」と質問をします。この人は小さな時から律法の戒めをすべて守ってきたことに自信をもっていたのですが、イエスは「あなたにはただ一つ欠けていることがある」と語り、「あなたが持っている物をすべて売り払って、貧しい人に分け与えなさい。そうしてからわたしに従ってきなさい」と告げたところ、この指導者は非常に悲しんで帰って行く。イエスはこれをご覧になって、「富を持つ者が神の国に入るのは、なんと難しいことか」と言われた。そういう話でした。今日の話はその続きとなります。ここにも捨てるというテーマが出てきます。これはどういうことか、ともに考えていきます。

## 1 自分のものを捨てる

### 1) ペテロの告白

ある指導者とイエスのやりとりを聞いていたペテロは、28節でこのように言います。「ご覧ください。私たちは自分のものを捨てて、あなたに従って来ました。」これは嘘ではありません。漁師をしていたペテロが、イエスに言われて網を下ろしたら網が破れそうになるほどの大漁で、腰を抜かすほど驚いた。それで彼はイエス足もとにひれ伏して「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから」と言って、すべてを捨ててイエスに従ったと5章に書かれています。

でもどうしてペテロはこのタイミングでわざわざこんなことを言ったのか。だいたい想像できます。「あの指導者は自分の物を捨てることができなかつたけれど、自分たちは違う。全部捨ててイエスに従ってきました。そうですよね、イエス様。」なにか自分たちのしてきたことを自慢したいようです。

### 2) 永遠のいのちを受けるためには

その心の奥底に何かありそうです。とにかく、ペテロのことばを聞いていてイエスはこう言われる。29節です。「まことに、あなたがたに言います。だれでも、神の国のために、家、妻、兄弟、両親、

子どもを捨てた者は、必ずこの世で、その何倍も受け、来たるべき世で、永遠のいのちを受けます。」

これはペテロをほめているのか、それともそうでないのか。どうもすっきりしません。好意的にとらえるならば、ペテロは自分のものを捨てたのだから、大きな報いを受けて、永遠のいのちを受け継いでいる。そのような約束を語ったように聞こえます。しかし別の見方もある。「あなた(ペテロ)は自分のものを捨ててきたと言うけれど、まだまだ捨てていないものが残っている。」そう言っているようにも聞こえます。

一体どちらだったのか、それは後々明らかにしていくことにして、それよりも皆さんが気になっているのは、永遠のいのちを受けるためには、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てなければならない。そこでしよう。教会に来る人はみんな家族を捨てなければならない。救われたいと思うなら家を捨てろと言っているのか。どう思いますか。仏教では「出家」という制度があって、家を捨てて俗世間から離れて一生懸命修行に励むなら救われると教えているそうですが、キリスト教もそれと同じなのか。もちろんそんなはずはない。ではこれはどういう意味なのか。

## 2 イエス

### 1) 受難予告

そのヒントは31~33節にあります。「さて、イエスは十二人をそばに呼んで、彼らに話された。『ご覧ください。わたしたちはエルサレムに上って行きます。人の子について、預言者たちを通して書き記されているすべてのことが実現するのです。人の子は異邦人に引き渡され、彼らに嘲られ、辱められ、唾をかけられます。彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。』」

31節はイエスの受難予告と呼ばれていて、ルカの福音書では数え方にもよりますが全部で三回出てくるなかの、ここがその三回目となります。

### 2) 何一つ分からなかつた

これを聞いていた弟子たちはこうでした。34節。「弟子たちには、これらのことが何一つ分か

らなかった。彼らにはこのことばが隠されていて、話されたことが理解できなかった。」

だいたい三度も同じことを言われたら、これは大切な教えに違いない、その意味をよく考えてみよう。そんなふうに襟を正して聞いてもよさそうなものです。もしわからなかったのなら、「それはどういうことですか」と積極的に質問すべきでしょう。ところが弟子たちは他のことは質問するのですが、このことに関してだけは何も発言しない。変ですね。最近、「不都合な真実」といういいかたがありますが、どうも弟子たちにとって都合が悪い話なのです。

なぜ十字架が不都合な真実だったのか。ペテロはこう言いました。「自分のものを捨てて、あなたに従って来ました。」それは嘘ではなかった。では、正しかったと言えるのか。ここは動機が問題なのです。自分たちがしてきたことをわざわざ強調するにはわけがある。ペテロは何のために捨ててきたのか。なんの見返りもあてにせず、ただ捨てたのではありません。イエスがイスラエルの王となった暁には、自分たちはきっと大臣の椅子に座ることになるのではないか。ペテロだけではない、弟子たちみなそれを期待していた。でもまだはっきり約束されたわけではない。ペテロは大臣の椅子をなんとか確実なものにしたいと考え、ここは立派な信仰を示すチャンスと思ってあんなことを言った。ペテロの心の中にあった動機がこれでした。

でもイエスはなんと言ったか。確かに「家を捨てた者」とは言いました。でも、その直前に「神の国のために」とも言っています。動機はどうでもいいから、とにかく家族を捨てれば結果オーライ、ではない。「神の国のため」捨てたかどうか問題。ところが、弟子たちは自分の出世のために家を捨てたということですから、まったく的はずれ。イエスが三回も受難と復活の話をして、耳を塞いで理解しようとしなかったのは動機が間違っていたからでした。

そうしますとこういうことになります。ペテロはなにもかも捨ててきたつもりだったようですが、イエスからご覧になるとまだ捨てていないものがあったということになりそうです。いったい何を捨てていなかったのでしょうか。

### 3 神の国のために

#### 1) 私たちの模範となる

いつも言うように、聖書はばらばらに書かれたのではなくて、ちゃんと前後のつながりがあって

書いてある。30節までの話しと31節以降の話しはちゃんとつながっている。そう考えてください。そのことを前提にしながら、イエスはどういう方であるのかを考えてみましょう。私たちに「こうなさい」と言われるときに、自分のことは棚に上げる方でしょうか。そうではないですね。イエスご自身がこう言われました。「だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後になり、皆に仕える者になりなさい。」(マルコ9章35節)皆に仕える者になりなさいと言われた以上、ご自分が仕える者になり、私たちの模範となったはず。

#### 2) 捨てられる

そうすると「神の国のために家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者」とあるけれど、これはイエスご自身のこととして考えてみたらどうか。もちろんイエスが進んで捨てたのではありません。異邦人に引き渡され、嘲られ、はずかしめられ、むちで打たれて殺される。人々がイエスを十字架で捨てたのです。イエスはなぜ捨てられていくのか。ご自分の栄光のためですか。いいえ。父の栄光のためでした。そして神の国に私たちを迎えるという神のご計画を成し遂げるためでした。

では、「来たるべき世で永遠のいのち受けます」とはなにか。これもイエスが語っている。「しかし、人の子は三日目によみがえります。」こうしてみると、全部イエスの十字架の死と復活とつながっていく。

#### 3) 人にはできないが神にはできる

今日は、なんども「捨てる」ということばが出てきて、心が苦しくなりそうです。あのペテロでさえ、まだ捨てていないものがあったと聞かされれば、もう私には絶対できないと思って悲しくなります。それは皆さんだけではない。イエスのことばを聞いていた人たちも、「それでは、だれが救われることができるでしょう」と言って嘆いたと書いてある。それでイエスは言われました。「人にはできないことが、神にはできるのです。」家族も家も捨てるなんて到底できない。私たちがそこで悲しんでいたら、イエスはちゃんとしてくれる。「そんなことは人にはできません。」ここで安心する。イエスは私たちができないことをわかっている。代わりに神がなんとかしてくれるらしい。では、神はどのようにしてしてくれるのでしょうか。

#### 4) 神の国へ迎えられる

イエスはご自分のからだで教えてくださいました。自分で捨てるのではない。捨てられていくのだと教えます。あなたがたはそういう道を通っていく。それはどういうことでしょうか。私たちはいつか死にます。自分で選んで死ぬのではありません。いやでも死は向こうからやってきます。私たちは本来死ぬ者ではなかったはずなのに、死んでいく。神の目からご覧になるなら異常なことです。例えば、金魚は水の中にいて生きていられますが、金魚鉢から外に放り出されたら死んでしまう。それと同じように、私たちはいのちという器の中で生かされていると考えてみましょう。いつまでもそこにいられるなら問題ありませんが、このからだには罪がありますので、いつか外に捨てられて金魚のように死ぬしかない。そのとき財産もなくなるし、家族もなくなる。それが死という意味です。

でもそれで終わりではありません。この世のいのちという金魚鉢から放り出されて死んだと思ったら、実はそこは神の国だった。私たちは、イエスの十字架を通してその神の国に迎えられていく。あなたはそれを信じてよいのだ。神がそのことをしてくださるのだから。

ペテロは今生きているこの世に望みを置きました。出世して偉くなるのだと、自分の国を思い描いていました。ペテロが捨てることができなかったのは、そんな自分の計画でした。

でも主は言われる。永遠に続く神の国に望みを起きなさい。あなたの計画はいつか風のように消えてなくなり、捨てなければならぬときが来る。またあなたの家族とも別れなければならぬときが来る。それをイエスは「捨てる」と表現している。でも神の国ではだれもあなたを捨てない。そのことをただあなたは信じてよい。イエスはご自分のからだといのちを十字架の上で捨ててくださいながら、私たちに語ってくださいます。